

本調査の結果からみえてくること



「第1回 妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査」監修
お茶の水女子大学大学院教授 菅原ますみ

今回のフォローアップ調査では、初めての出産という大きなイベントを経てスタートした322組のその後の1年間の子育て生活の変化を追いかけてきました。本報告書では、親子の愛着関係の形成（第1章）、子育てのストレス（第2章）、夫婦の助け合い（第3章）、ワークライフバランス（第4章）、居住環境（第5章）、周囲の人々のサポート・ネットワーク（第6章）など、多側面での1歳児期の子育ての実態について、妊娠期からの変化を含めて報告しています。また本調査では、養育者自身の生活の良質さは子育てを通じて子どもの発達の健やかさに影響すると考え、妊娠期から両親のQOL（クオリティ・オブ・ライフ）の変化についても追いかけてきています。今回の結果から、両親ともに0歳児期でのQOLが1歳児期の愛着関係や親としての成長感と関連することがわかりました（第7章）。健やかな子育てにとって、心身の健康や物理的環境など親自身のコンディションを整えていくことの重要性をあらためてデータで確認することができました。

0歳代の親密なかかわりの中で芽生えていく愛着は、親子関係の大切なファースト・ステップとなります。1歳時点の母親の87.6%が“自分に抱っこされたりかわいがられたりすることを子どもが喜ぶ”と実感し、66.8%が“子どもが（自分の）ひざや胸でくつろぐのが好き”と感じているなど、母子の愛着関係は全体として順調に発達している様子がうかがわれました。一方、父親では、同じ項目での該当率は66.5%、48.4%と母親より低率でした。“仕事が忙しすぎて子どもと過ごす時間が少ない”と感じている父親は1歳時点で4割近くとなっており、実働時間が平日平均11時間以上の父親のうち“ほとんど毎日子どもと遊ぶ”父親は21.0%しかいない実態も明らかになりました。11時間未満の父親の52.4%と比較すると大きな隔たりがあります。乳児期の父子関係を支えるための時間的保障の大切さがあらためて浮き彫りとなるような結果だといえるでしょう。

1歳後半の時期は、自由に行動ができるようになって好奇心いっぱい探索活動にいそむようになりますが、一方で、身の安全を守り社会的ルールに合わせた行動のコントロールはまだまだ未熟で、養育者にとっては目を離すことのできない時期です。“自分でやる！”といった自我も芽生えてきて、自己主張の激しい時期にも入っていきます。今回のデータからも、“子どもに駄々をこねられ”てイライラを感じた母親は0歳児期の39.3%から1歳児期には69.7%まで増加し、61.2%が“公共の場での子どもの扱いに困って”苛立った体験も持っていました。初めての子育てに奮闘する親たちを支える対人的、物理的サポートの重要性はますます大きなものとなる時期といえますが、本書の随所でそのことを裏付けるデータを報告していますので、ぜひお読みいただきたいと思います。前回の調査（0歳児期）では、妊娠期から0歳児期への大きな変化として、夫婦関係の親密さの急激な低減傾向を報告しました。この傾向は少しゆるやかになったものの、依然として低下が続いていることを今回も確認しています（第3章）。今後の経過に注目すると同時に、どのような要因が夫婦のコミュニケーションと関係性を支えることができるのか、さらに分析を深めていきたいと考えています。